The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカルと三つの無知
Author(s)	山上, 浩嗣
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2013, 53, p. 67-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27201
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカルと三つの無知

山　上　浩　嗣

パスカルにおいて無知は、神なき人間が置かれた状態である。人間は無知から逃れることを望むが、それがかなえられないゆえに不幸である。

> 『伝道の書』は、神なき人間がなにごとにも無知であり、不幸から逃れようもないことを示している。欲することがかなわないのは、不幸なことだからだ。人間は幸福になりたいと願い、なんらかの真理を確証したいと望む。しかし人間は、知ることもできず、知ることを願わずにもいられない[1)]。

無知を自覚する主体は不幸である。動物は人間より無知かもしれないが、知りたいと望まないかぎりにおいて、不幸ではない。

なぜ人間は無知なのか。パスカルは主として二つの理由を挙げている。第一は、原罪による人間の堕落である。神は人間を完全無垢な存在として創造した。人間は光と知性に満たされていた。「このとき人間は、目を曇らせる闇のなかにも、死すべき状態のなかにも、自己を苛む悲惨のうちにもなかった[2)]。」だが人間は、あるときとてつもない倨傲にとらわれ、神の支配からの独立を企てた。その結果、

> 私［= 神］は人間をなすがままに放置し、人間に服従していた生き物どもを刃向かうようにしむけ、その敵となした。そうして今日では、人間は獣たちに似たものとなり、あまりにも私からかけ離れた状態にあるため、人間のなかには、創造主の混沌とした光がかろうじて残されているにすぎない。それほどまでに、人間のあらゆる知識は、消失と混乱のいずれかの状態にあるのだ[3)]。

1) S110-B389.
2) S182-B430, p. 919.
3) S182-B430, p. 919.

人間の途方もない欲望に対して神から下された罰が、当初定められた階層秩序の変更（「神／人間／動物」から「神／人間＝動物」へ）と、人間の知的能力の衰退によって説明されている。このとき残されたのは、自己が「真理」と「善（幸福）」を独力で見いだすことができないという悲劇的な認識のみである[4)]。人間は無知を自覚するという点で、動物よりもむしろ悲惨である。人間は神から隔絶することでもはや神とは何かを知らず、とりわけ、自分が何者であるかがわからなくなる[5)]。人間は自分自身にとって謎の存在となり、自己の現状と運命についてたえず自問することを強いられるだろう。

人間の無知についてパスカルが指摘する第二の原因は、人間が身体をもつという事実に関わる。パスカルにおいて自然は無限である。いかなる広い空間（たとえば「天空をめぐる幾多の星に取り囲まれた円周」）にもより大きな空間が存在し、いかなる小さな生物（たとえば「壁蝨（だに）」）の極小の部位も、より下位の物質に分割できるはずだ[6)]。人間は身体をもつかぎりにおいて、大きさの点でそのような二つの無限の「中間」であり、その置かれた位置も、無限の広さをもつ宇宙の「中間」（「中心」ではない）にある極小の一点である。このとき人間の認識のおよぶ範囲にもおのずと限界が生じる。「われわれの知性がその理解の対象となる事物の序列のなかで占める地位は、われわれの身体が自然の広がりのなかで占めている地位と同じである[7)]。」人間は自然界の多種多様な事物の「中間」をかいま見ることしかできず、「その起源と終局を知ることについては、永遠の絶望のなかにある[8)]。」人間は他方、身体と精神という異種の実質の混成であるが、この事態がまた、人間の認識能力を著しく小さくしている原因となる。パスカルにおいて、主体が対象を認識する条件は、両者になんらかの「均衡」（proportion）や「類似」（ressemblance）が存在することである。有限は無限を認識できないのと同様、身体と精神からなる存在は、純粋に物質的な対象も、純粋に精神的な対象をも知ることができないのである[9)]。

また、『プロヴァンシアル』でも、やや特殊な文脈においてであるが、無知が主題化されている。それは、「第四の手紙」の「無知の罪」（le péché d'ignorance）をめぐる議論に際してである。手紙筆者モンタルトの対話相手であるイエズス会の神父の主張はこうだ。

---

4) S182-B430, p. 920.
5) S182-B430, p. 922.
6) Voir S230-B72, pp. 942-943.
7) S230-B72, p. 946.
8) S230-B72, p. 944.
9) Voir S230-L199-B72, pp. 948-950. パスカルにおける人間の「中間」的地位とその認識の限界との関連については、次の拙論で詳述した：山上浩嗣「パスカルにおける「中間」の問題」『関西学院大学社会学部紀要』91号、2002年、113-136頁。

> われわれが罪を犯す場合、あらかじめ神から、その行いが悪であることを知らされ、それを避けるように促す霊感を与えられていないかぎりは、その罪の責任を負わされることはない[10)]。

つまり、ある行いが罪とされるためには、行為者が事前に神から、その行いが悪であることを知らされている必要がある、ということである。モンタルトとその友人のジャンセニストは、これに対してそれぞれ反論を行う。とりわけ後者は、パウロも無知によって罪を犯したこと、イエスを十字架につけた者どもが、自分たちの行いが悪であることを知っていたわけではないにもかかわらず赦しを必要としたことなど、聖書に基づいた論拠を提示した上で、こう述べる。

> 神父様、[...] これからはもう、次々と身内の著作家をもち出してきては、正しさの何たるかを知らずに罪を犯すことは不可能だ、とはおっしゃらないでください。そうではなく、聖アウグスティヌスや昔の教父たちに倣い、正しさの何たるかを知らないときには、罪を犯さずにはいられない、と言ってください[11)]。

パスカルにとって、道徳が問題になるとき、正邪に関する無知は、罪を犯す可能性を減少させるどころか、むしろ必然的に罪を導く。それが悪であると知らずになされた行為も、罪であることを免れない。無知は罪の条件であり、ひいては、無知そのものが罪なのである。アリストテレスの説明によれば、行為の責任を免除されるのはその行為が無意識になされた場合だけである（弩弓（どきゅう）を見せようとしてつい矢が放たれてしまい人を傷つけた場合や、メロペーのように、敵を殺すつもりが自分の息子を殺してしまった場合など[12)]）。人が自身の行為の正邪を知らない場合も、その行為に意志が介入しているかぎりにおいて、断罪を免れない[13)]。

このように、人間の無知は、パスカルによってことあるごとに強調されている。『パンセ』においても『プロヴァンシアル』においても、この認識は悲劇的な価値づけを与えられてお

---

10) *4e Provinciale*, p. 311.

11) *4e Provinciale*, p. 322.

12) *4e Provinciale*, p. 324.

13) 次の研究は、上の論旨とは直接関係がないが、『プロヴァンシアル』においてイエズス会士が民衆の「無知」をいかに利用したかを分析している：Jean-Marie Nicolle, « Les jeux de l'ignorance dans les *Lettres Provinciales* », Conférence donnée lors du colloque consacré aux *Provinciales*, à l'Université de Rouen en 2002 (http://jm.nicolle.pagesperso-orange.fr/jmn/sujet/ignorance_pascal.htm). パスカルがこのようなイエズス会の策略を批判するのとは対照的に、後述のように、『パンセ』において、政治的な正義に対する民衆の無知を「健全」と評価しているのは興味深い。

り、「無知」はやがて解消すべき悲惨な状態とみなされている。とりわけ彼のキリスト教弁証の試みにおいて、このことが、語りかける相手に納得させるべき基本的な認識をなしていることはまちがいない。

とはいえ、パスカルにおいて、人間のあらゆる活動における「無知」が、すべてこのような否定的な価値を負わされているわけではない。人間の知るべき対象は多岐にわたっており、そのそれぞれにおいて一律の態度を適用することは不可能だ。それにそもそも、人間の知性が原理的に有限である以上、神のような全知を期待しても仕方がない。人間は、おのれの無知なる現状を認めた上で、どのようにふるまうべきなのか。この問いについてのパスカルの考えをたどること。これが本論の目的である。

パスカルが言及する人間の無知は、主として次の三つである。すなわち、正義に対する無知、歴史上の出来事や自然の因果関係に関する無知、自己の死後の運命に関する無知だ。これらはそれぞれ、政治、学問、宗教のそれぞれの分野に関わる。そしてこの三分野は、『パンセ』の一断章に登場する「三つの秩序」、すなわち「身体の秩序」「精神の秩序」「愛の秩序」のそれぞれに対応している[14)]。以下では、これら三つの無知について、順に考察していこう。

1. 正義の無知

1）既存の法を尊重すること

プラトンは理想国家の統治を真の正義を見つめることのできる「愛知者」にゆだねたが、パスカルにおいて、正義は人間が知りうる対象ではない。パスカルは政治を、人間の無知を前提とした営みであるととらえる。

> 人間は、みずから統治すべき世界のしくみを、いったい何を基盤にして築き上げようとするのか。各個人の気まぐれだろうか。とんでもない！では、正義だろうか。いや、人間はそんなものを知らない。もし知っていたら、人間界のすべての原則のなかでもっとも普遍的な次の原則を打ち立てたりしなかっただろう。すなわち、個々人はその国の習慣に従うべし、との原則だ[15)]。

各地の習慣が、正義に代わる統治の基盤となっている。その証拠に、法は場所によって異なるし、時間によっても変化する。それらさまざまな実定法も、すべて人類共通の「自然法」

---

14) S339-B793.
15) S94-B294, p. 867.

には従っているはずだという反論を、パスカルは言下に否定する。「滑稽の極みだが、人間の気まぐれが法を甚だしく多様化したばかりに、もはやそんな［共通の］法などひとつもないのだ。／盗み、近親相姦、子殺し、親殺し、すべてが有徳な行為に数えられたことがある[16]。」習慣には本来、正義の代わりとなるいかなる資格もない。それでも習慣が法として通用するのは、「それが受け入れられているからという唯一の理由による[17]。」法は正しいから守られるのではなく、守られることによって正しいとみなされるのである。「法が正しいがゆえに従っているという者は、法の本質にではなく、彼が想像する正義に従っているのだ[18]。」法の通用する期間が長ければ長いほど、民衆はその「権威」（autorité）への信頼を高めていく。政治は、人間の正義に対する無知と、法が虚構であることについての無知という、二つの無知によって機能している。

この第二の無知を、パスカルは「愚かさ」（folie）と呼んでいる。「王たちの権力は、民衆の理性と愚かさとによって成り立っているが、愚かさのほうにずっと大きく依存している[19]。」つまり、国家の秩序の安定を支えているのは、民衆の無知と愚かさである。もし民衆が法が無根拠であると知れば、制度の改変、ひいては体制の転覆を求めて為政者への反乱を企てるだろう。フロンドの乱がその一例である。これによってだれが利益を得たのか。王権は多大な損害を被り、蜂起した民衆は弾圧され、反乱を煽動した貴族たちも破滅に追いやられた。国家全体が著しく疲弊したのだ。国家の法の起源を探求すること、「それは、確実にすべてを台なしにする行いである[20]。」パスカルはこうして、「人々の幸福のためにこそ、しばしば彼らを欺くべし」と語る「もっとも賢明な立法家」（プラトン）を支持する[21]。国家の起源は強者による弱者の利益の横領である[22]。「それ［横領］をすぐに終わらせたくないのなら、そのことが正統で、永続的なものであると信じさせることだ。そして、その起源を隠蔽することだ[23]。」

次は、知恵の多寡によって区別された集団のそれぞれが、既存の法に対して取る態度につ

16）S94-B294, p. 868. G・フェレロルはしかし、パスカルは「自然法」の存在を認めていると論じている（G. Ferreyrolles, *Pascal et la raison du politique*, Paris, PUF, 1984, ch. IV : « La Loi naturelle », pp. 147-201）。この解釈は論議を呼び、次の二著で反論されている：Ch. Lazzeri, *Force et Justice dans la politique de Pascal*, Paris, PUF, 1993, pp. 203-205, note 42 ; M. Pécharman, « Pascal et la politique », dans *L'État classique. 1652-1715. Regards sur la pensée politique de la France dans le second XVIIe siècle*, textes réunis par H. Méchoulan et J. Cornette, Paris, Vrin, 1996, pp. 122-125.

17）S94-B294, p. 870.

18）S94-B294, p. 870. Cf. S668-B673.

19）S60-B330.

20）S94-B294, p. 870.

21）S94-B294, p. 871.

22）Cf. S98-B295, S668-B304.

23）S94-B294, p. 871.

いて述べた一節である。

> 民衆（le peuple）は貴族を敬う。生半可な知者（les demi-habiles）は、生まれという優越はその人物によるのではなく偶然によるのだと言って、貴族を軽蔑する。知者（les habiles）は、民衆の考えではなく、裏の考え（la pensée de derrière）に従って、貴族を敬う。知恵よりも熱情にまさる篤信家（les dévots, qui ont plus de zèle que de science）は、貴族が知者たちによって敬われている理由を知りながらも、貴族を軽蔑する。彼らは信心によって与えられた新たな光によって判断するからだ。だが、完全なキリスト者（les chrétiens parfaits）は、さらに別の上位の光によって、貴族を敬うのだ。こうして、人が光を多く与えられるに従って、意見は正から反へと順に変化する[24]。

民衆は、貴族階級による国家の支配を正当な根拠によるものと信じて、貴族に敬意を抱く。共同体の秩序を善と見るパスカルの立場からすれば、このような民衆の「愚かさ」はむしろ好ましいものとみなされる。事実、民衆と同様、「知者」や「完全なキリスト者」は、既存の法が支配階級の恣意以外の根拠をもたないと知りながら――「裏の考えに従って」――、その支配を受け入れている。反対に、「生半可な知者」および「知恵よりも熱情にまさる篤信家」は、法の恣意性を理由に、貴族による支配に反旗を翻す。これら直情的な反体制の改革者たちの誤りは明白である。普遍的な正義などどこにも存在しない以上、改革後に打ち立てられた別の法制度も、新たな支配者の考える主観的な正義以外の根拠をもたないのだ[25]。

ここで注意すべきは、パスカルが政治の領域において、人々の善意や悪意ではなく、それらのもたらす結果だけを問題にしているという点である。彼が、現行の法の恣意性を民衆に対して隠蔽することを推奨していることはすでに見た。極端に言えば、単に支配者側がおのれの利益を守るという独善的な理由によるものであったとしても、それは許容されるのである。他方、「生半可な知者」と「篤信家」はともに、現体制に不備や不当を認め、衷心からよりよい社会の実現を目指して行動を起こしているのかもしれない[26]。みずからの身の危険

---

24) S124-B337.

25) モンテーニュはこの点を明確に指摘している：「いかなるものであれ、現行の法律を取り替えることの利益が、そうして変更することによる弊害と比べて、より明らかであるかどうかは、大いに疑問である。なぜなら、国家というものは、さまざまな部品が緊密に組み合わされた建物のようなもので、そのひとつを動揺させれば、かならずその影響が全体に及ぶからである」（*Essais*, I, 23, p. 119）。

26) なお、「生半可な知者」と「知恵よりも熱情にまさる篤信家」の目指す社会像はおのずと異なる。前者は純粋に世俗的な観点からの公共善の実現を、後者は宗教の理想とする共同体の創設を、それぞれ望むはずだからだ。G・フェレロルは、前者の錯誤が「身体の秩序」と「精神の秩序」の混同

を顧みず、過度の抑圧に苦しむ人民の救済だけをひたすらに求めて立ち上がったのかもしれない（実際、暴君の暗殺を成し遂げたとたん、刺客に命を奪われた者たちの例は枚挙にいとまがない）。しかしパスカルにとって、そのような自称改革者の善意は、なんら称賛に値しないどころか、唾棄すべき自己愛の発露にすぎない。国家に騒乱をもたらし、ひとつの悪を別の悪に置き換える結果に終わることは目に見えているからである。パスカルにとって、地上において避けるべき最大の悪は内戦であり[27]、いかなる犠牲を払ってでも維持すべき最高善は平和である[28]。国家の平和を妨げる行いは、どのような高邁な理想をともなっていても、不正の極みと断じられるのである[29]。

2）賢明なる無知

こうしてパスカルにとって、政治の領域において、無知はそれ自体、いかなる瑕疵でもない。彼によれば、無知には二種類あるという。

> 世間はものごとを正しく判断する。なぜなら、世間は人間の真の座である自然の無知のなかにあるからだ。知識には互いに接する両極がある。一方の極は、すべての人間が生まれつき置かれている純粋な自然の無知（ignorance naturelle）である。他方の極は、偉大な魂のもち主が到達する無知である。彼らは、人間が知りうることのすべてをひと通り見渡したのちに、自分はなにも知らぬことを悟り、出発点となったまさに同じ無知へとまた立ちもどるのである。だがそれは、おのれを知る賢明なる無知（ignorance savante）である[30]。

にあり、後者の錯誤が「身体の秩序」と「愛の秩序」の混同にある、と論じている。「三つの秩序」のそれぞれは他から独立していて、ひとつの秩序の他の秩序への介入は「圧政」（tyrannie）につながる。次を参照のこと：G. Ferreyrolles, *Pascal et la raison du politique*, *op. cit.*, pp. 156-169. また、「知恵よりも熱情にまさる篤信家」の解釈に際して、塩川徹也『パスカル「パンセ」を読む』岩波書店、2001年、175-176頁、は有益である。

27）S128-B313.

28）S116-B299.

29）S119-B878には、« *Summum jus, summa injuria* »（「極度の正義は、極度の不正となる」）というキケロの言葉が引用されている。

30）S117-B327. この断章には、モンテーニュの次の一節からの影響が指摘されている（B. Croquette, *Pascal et Montaigne*, Genève, Droz, 1974, p. 25）：「無知には知識に先立つ初歩的な無知（ignorance abécédaire）と、知識の後からくる博学の無知（ignorance doctorale）とがある。すなわち、知識が打ち倒し破壊する無知と、知識が生み出し育む無知とである」（*Essais*, I, 54, p. 312）。「博学の無知」という表現は、ニコラウス・クザーヌスの「学識ある無知」（*docta ignorantia*）という用語を想起させる。P・ヴィレーは、クザーヌスからモンテーニュへの直接の影響関係については不明としている（P. Villey, *Les Sources et l'évolution des* Essais *de Montaigne*, Paris, Hachette, 1908, pp.

無知には「自然の無知」と「賢明なる無知」の二つがある。前者は、生まれたての人間すべてが置かれる、いかなる知識をももたない状態。後者は、人間が到達可能な最高の知恵を備えた無知の状態、だという。この二つの無知は、「互いに接する」ばかりでなく、「同じ無知」でもある。このことは、「人間の知りうることのすべて」が、（神のもつ知恵と比較して）いかにささいなものにとどまるかということを示唆している。では、二つの無知の間にある違いとは何か。それは、その無知を自覚しているか否かという一点である。最高の知恵が到達する無知とは、知識を究めながらも、自己が無知であると知っている状態、すなわち、ソクラテスの到達した「無知の知」の状態にほかならない。そしてここには当然、きわめて真摯な謙遜の念がともなっている。謙虚でなければ無知は自覚できないからだ[31)]。ここで、「自然の無知」が、先に引いた断章 S124-B337 における「民衆」の状態に、「賢明なる無知」が、「知者」および「完全なるキリスト者」の状態に、それぞれ対応していることは明らかであろう。知恵の階梯をひとつひとつ辿ることで人が獲得する「光」とは、みずからの無知に対する確信と、それにともなう謙遜の徳にほかならない。

これとは対照的に、「両極の間にあって、自然の無知から出発し、賢明なる無知へとまだ到達できない者たちは、思い上がった知識（science suffisante）のみかけをまとい、知ったかぶりをする。この連中こそが世間を惑わし、すべてにおいて誤った判断を行う[32)]。」彼ら中間者の錯誤は、自身の知恵がいかにささいであるかを知らない点と、わずかな（しかも不確かな）知識のゆえに驕り高ぶる姿勢にある。「生半可な知者」「知恵よりも熱情にまさる篤信家」が、この中間者に当たることは言うまでもない。

パスカルにとって、政治は純然たる世俗の営みであり、そこに宗教はいかなる形でも関与してはならない。このことは、キリスト教の教義が強調している点でもある[33)]。パスカルが政治を「身体の秩序」に位置づけ、「愛の秩序」との間に無限の懸隔を設けたのもそのためである。上の「篤信家」は、宗教の原理を現世の共同体に及ぼそうと試みた点で誤っている

111-112）が、久保田剛史は、両者の関連を説得的に論証している（「モンテーニュとニコラウス・クザーヌス」『仏語仏文学研究』26号、東京大学仏語仏文学研究会、2002年、5-18頁）。

31）次のモンテーニュの言葉を聴こう：「私の修行の成果は、学ぶべきことがまだ無限にあると悟ったこと以外にはない。こんなにしばしば自分の無力を思い知らされたおかげで、私は謙虚に向かう姿勢と、命じられた信念には服従し、自説に対してはつねに変わらぬ冷静と節度を保とうとする姿勢を身につけたし、また、規律と真理の大敵であり、あくまでも自己を過信する、あの迷惑千万なけんか腰の傲慢に対する嫌悪を身につけた」（*Essais*, III, 13, p. 1075）。

32）S117-B327.

33）次を参照のこと：山上浩嗣「パスカルにおける「習慣」の問題」『フランス哲学・思想研究』12号、日仏哲学会、2007年、16-27頁（とくに18-19頁）。

のだ[34]。そのような地上的な営為においてパスカルが尊重するのは、真理を探求する姿勢ではない。むしろ彼は、真理が不在であることを認めて、「おのれを知る無知」、すなわち人間が根本的な無知の状態にあることを自覚することに理想を見ている。だがそれは、人類最高の知恵者にしてようやく到達できる境位にすぎない。凡人はみな、現今の法や制度に不満をもち、いたずらに変革を叫んで国家に損傷を与える。これよりは、現今の法が正義に基づいていると想像して従う、純然たる無知の状態（「愚かさ」の状態）のほうがずっと望ましいのである。

以上のことがらは、パスカルが説く君主の倫理とも一貫している。次に、このことを確認しておこう。

3）君主の倫理

パスカルは、『大貴族の身分に関する講話』（以下『講話』と呼ぶ）という作品で、貴族の子弟である「若君」に対して、将来彼が君主となったときにもつべき心構えについて語っている。パスカルはその「第一」を、およそ次のような印象深いたとえ話で始める。

ある男が嵐に遭遇し、見知らぬ島に漂着した。その島の住民たちは、ちょうどしばらく前に行方不明になった王を探していたところであった。男はその王と体つきも顔つきもそっくりだったため、住民たちは彼を王であると思い込み、そのように遇した。男ははじめは戸惑ったものの、結局この幸運に身を任せることにした。彼は王としてふるまいながらも、「二重の考え」（une double pensée）によって、自分が今の境遇にあるのは偶然の結果であることを忘れなかった…。

パスカルによれば、若君が公爵の息子という高位にあり、富にも恵まれているのは、この男が島の王になったのに比べて勝るとも劣らぬほど大きな偶然による。富が先祖から若君に相続されるのは、自然法によるのではなく、単に立法者の恣意のおかげにすぎない。また、若君が領地において所持する権限は、偽者の王と同様、自分本来の資質や功績によって得られたものではない。

続くパスカルの助言を引用しよう。

> さきほど話題にした男のように、二重の考えをもつことです。人々に対して、表面的にはご自分の地位にふさわしくふるまえばよいのですが、秘かな、しかしより真実の考えによって、自分はもともと、彼らよりもまったく優れてなどいないということを認めなければなりません。[…]

34）注26参照。

あなたを敬愛する民衆は、おそらくこの秘密を知らないでしょう。彼らは、貴族の身分が現実の徳性（une grandeur réelle）であると信じ、貴族たちを、他の人間とは別種の人間であるとみなしかねないほどなのです。彼らが誤っていると知らせるには及びません。ですが、そうして人からもてはやされることに天狗になり、状況を悪用してはいけません。そしてとりわけ、自分が他人よりもなにか優れた資質をもっているのだと思い込むなどして、本当の自分を見失うことなどありませんように[35)]。

この『講話』には、上で見てきたパスカルの政治をめぐる考えと、そこにおける「無知」の役割に関して、いくつか共通する観点が認められる。

第一に、君主は「二重の考え」をもつべしとする点。「二重の考え」とは、一方で、自分が貴族としての社会的責務を負っているという事実についての認識、他方で、自分にそのような地位が与えられたのはひとえに偶然によるものであり、そこに自己の生来の資質はまったく関与していないということの自覚である。この「二重の考え」は、既存の法を根拠づける正義が不在であることを知りながら、その法に従うことを正当とみなす「知者」や「完全なるキリスト者」が抱いていた「裏の考え」を想起させる。「二重の考え」もまた、君主がみずからの統治者の資質に正当な根拠がないことを知りながら、その社会的な責務を遂行することを可能にするのである。

第二は、自己を知ることの重要性を強調している点である。パスカルにとって、上の「二重の考え」を抱く状態とは、つまるところ自己の本来の姿を意識している状態を意味する。自分が民衆よりもなんら優れた資質をもたぬことを知ることが「真実の考え」なのであり、「人からもてはやされることに天狗になること」が「本当の自分を見失うこと」である。高位が自分に与えられたことを当然と受け止め、自分が庶民よりも高貴な人間であると思い込むことは、島に漂着した偽者の王が、自分こそ王座にふさわしいと考えるのと同じように誤っている。自己を知るとは、自分の身のほどを知って謙虚に努めるということである。これは、自分が無知であることを自覚する「賢明なる無知」の境位に通じる。

そして第三に、現行の法体制のなかに「正義」を想像して服従する民衆の錯誤を容認する点である。民衆は、貴族の権威を現実のものとみなし、場合によっては、彼らを「別種の人間」とまで錯覚して畏敬の念を抱いている。その上でパスカルは、あえて民衆に真実を知らせるには及ばないという。これはもちろん、彼らが貴族に対する崇敬を失い、服従をやめ、ひいては反乱を起こす可能性を未然に防ぐためである。『講話』においても、国家の平和を最高善とみなす姿勢は明らかである。

---

35) *Discours sur la condition des grands*, Ier Discours, pp. 749-750.

『講話』におけるパスカルの主張はこうして、『パンセ』における彼の政治論を忠実に敷衍したものであると言えるが、ここには一点、『パンセ』では明瞭ではなかった要素が強調されているように思われる。それは、為政者の臣民への愛である。君主が「二重の考え」をもつことは、自己の優越性の否定、驕慢への自戒につながることは、すでに見た。このような謙遜の念は、他者への思いやりを生じさせ、権力の濫用を抑制させる効果をもたらすのである。「秘かな考え」は、心内にのみ生じる純粋な観想ではない。このことは、「第一の講話」の末尾部分に明らかである。

> この忠言は大変重要です。なぜなら、大貴族のあらゆる乱行、あらゆる暴力、あらゆる虚栄は、彼らがみずからを知らぬことに由来するからです。自分が他のすべての人間と対等な存在であると衷心から認め、神から授かった、自分を他人の上に立たせるわずかな特権に見合う性質も自分には備わっていないと納得している人ならば、他人に対して横柄にふるまうことなど、まずないでしょう[36]。

臣民が君主に寄せる敬意は、その君主の身分を定める法や習慣という制度の威光にのみ依存するのではなく、むろん彼のもつ人格にも影響される。たとえ国家の平和が大切だと認識していても、暴君に素直に従うのは困難だ。為政者と民衆の関係は相互的なものであり、共同体の秩序が維持されるためには、前者が後者の意志と希望を尊重することは不可欠である。君主の思い上がりによる横暴は、あらゆる秩序を破壊する[37]。

パスカルは「第二の講話」で、臣民が君主に捧げる敬意を、「制度上の敬意」（les respects d'établissement）と「自然の敬意」（les respects naturels）の二つに区別し、前者を秩序への配慮によって生じる儀礼的な敬意、後者を君主の自然本性上の偉大さに向けられる敬意であるとしている。民衆が「自然の敬意」を与えるのは、「魂あるいは身体の実質的な特性」（qualités réelles et effectives de l'âme ou du corps）を備えた君主に対してのみである[38]。民衆はそのような内面の徳を欠いた君主にも「制度上の敬意」を拒んではならないが、「自然の敬意」に従えば、より誠実に奉仕することができるだろう。君主は、臣民との間にそのような関係を築くことができるように、「自然の偉大さ」を身につけるように努めなければならない。謙遜は、自己愛と対置され、キリスト教最大の徳である「慈愛」（charité）につ

---

36) *Discours sur la condition des grands*, Ier Discours, p. 750.

37) Cf. S680-B477, p. 1216 :「したがって、われわれは生まれながらにして不正である。なぜならすべては自己に向かうからだ。これはすべての秩序に反している。全体を志向しなければならない。自己への傾きは、まったき無秩序の始まりである。」

38) *Discours sur la condition des grands*, IIe Discours, p. 751.

ながる徳であり[39]、まぎれもなくそのような自然的な資質のひとつである[40]。

このように見たとき、政治の領域における民衆の「無知」は、あらためてどのように解釈されるだろうか。パスカルは民衆が法の無根拠性を知らずに従うさまを、「愚かさ」と形容したが、この愚かさは国家の平和を維持するために積極的な役割を果たしていた。だが、それだけではない。この国家の平和の状態において幸福を得るのは、まさにその成員である民衆自身である。民衆がこの「愚かさ」の状態を脱して「生半可な知識」を得たとたん、制度に対する反乱が内戦へと発展し、やがては国家全体が崩壊へと向かう。そうしてその成員も滅び去っていく。こう考えると、パスカルが若君に、民衆を無知の状態にとどめておくように助言するのは、その当の民衆の幸福と安全を保証するためであると理解することができる。為政者は、臣民を愛すればこそ、彼らに真実を告げないほうが賢明なのである。パスカルは『パンセ』にこう記している。「愛を犠牲にしてまで真理を維持しようとするのもまた、誤った信心（un faux zèle）である[41]。」

人間の正義に対する無知は、共同体の保全、ならびにその成員の幸福の障害にはならない。むしろ中途半端な知恵こそが、平和を妨げるきっかけになりかねない。だが、民衆の「愚かさ」だけに支えられた平和は、脆弱なものにとどまる。国家の安寧のためには、為政者こそが本来の自己の卑小さと無知を知り、臣民を「愛」をもって遇しなければならない。このときはじめて臣民は、君主に「自然の敬意」を捧げるのである。

次に、「精神の秩序」における人間の無知について見ていこう。

---

39) パスカルの思想における「慈愛」（単に「愛」とも訳される）の重要性については、次の拙論を参照のこと：山上浩嗣「パスカル『パンセ』における「愛」」『愛を考える—キリスト教の視点から』平林孝裕・関西学院大学共同研究「愛の研究」プロジェクト編、関西学院大学出版会、2007年、111-137頁。

40) もっとも、『講話』において「慈愛」（charité）は、神の国においてのみ可能な統治の原理であり、地上の国家を支配しているのはそれとは対極にある「邪欲」（concupiscence）である。パスカルは『講話』の「第三」で若君に、あなたは人々の現世の欲望の対象となる富を備えた「邪欲の王」にすぎないのだから、そのことを自覚して、人々に現世的な幸福だけを授けることに専心せよ、と説いている。したがって、『パンセ』のパスカルの主張と同様、『講話』においても、「愛の秩序」と「身体の秩序」、宗教と政治とは、互いに独立した領域なのである。しかし、その上でなお、『講話』の末尾でパスカルは、青年に次のように語りかけている：「邪欲とその王国をさげすみ、すべての臣民が愛だけを求め、愛の富だけを切望する、愛の王国（royaume de charité）を希求なさることです」（*Discours sur la condition des grands*, IIIe Discours, p. 754）。この点については、前掲拙論「パスカルにおける「習慣」の問題」19-20頁で論じた。

41) S787-B930, p. 1338.

２. 学問的真理の無知

１）権威の学と理性の学

『真空論序言』における学問の二分類についてはよく知られている。ひとつは、「ただ著者たちが書いていることを探求するだけの分野」。たとえば「歴史、地理、法学、言語［空白］そしてとりわけ神学」がそれだ。これらは、「ただ記憶のみに依存し、純粋に歴史的であって、著者たちが書いたことがらを知ることのみを目的とする。」したがって、過去に書かれた書物の全体に含まれている以上の知識は得られない。「われわれを教えることができるのはひとえに権威（autorité）のみである[42]。」これらの学問をここで仮に「権威の学」と呼ぼう[43]。

他方、「感覚（les sens）と推論（le raisonnement）に従う分野」がある。「幾何学、算数、音楽、自然学、医学、建築」がそれだ。ここにおいて権威は無用であり、理性のみが隠された真理を探究することができる。これらの学は、「完全になるためには、増し加えられなければならない」のであり、「われわれはそれらを、古代人から受け取ったときより完成された状態で、後続の人々に手渡すであろう[44]。」これらの学をここで「理性の学」と呼ぶ。

さて、「権威の学」「理性の学」両者のあり方のいずれもが、人間の認識の有限性を明らかにしている。言い換えれば、学問という営為が、人間の根本的な無知を前提にして成り立っていることがわかる。どういうことか。

まず、「権威の学」においては、われわれが知りうる知識の範囲を、既存の書物が画している。その典型は歴史学である。たとえば、古代においてある国に起こった出来事について知るためには、それについて書かれた書物や資料を参照する以外に方法はない。だが、そのようにして得られた知識が真実かどうかについては、決定的な判断は不可能である。その著者が嘘をついていたり勘違いしている可能性があるし、書かれていること自体が伝聞に基づいている場合もあるからだ。後者の場合、新たにその伝聞情報の信憑性を疑う余地が生じる。複数の資料の間で相互に矛盾する記述が見つかることもあるだろう。その場合、いずれの著者の権威がより正当かという判断を求められるが、この判断も確実ではありえない。判断に際して、著者の誠実さや教養の高さ、記述の詳細さなどの周辺的な要素を考慮に入れるが、

---

42) *Sur le traité du vide, Préface*, pp. 84-85.

43) 塩川徹也は、『真空論序言』における「権威」についてこう説明している：「ここで問題になっている権威とは、盲目的服従を要求する圧制的な権力ではなく、直接経験できない事柄の認識において、他人の報告に信用を与える重みであり、端的に言えば報告の信憑性そのものなのである」（塩川徹也『パスカル考』岩波書店、2003年、88頁）。

44) *Sur le traité du vide, Préface*, pp. 85-86.

そのような手がかりそのものが当てになるとは限らないのだ。いかにも信憑性が高く見える人物こそを怪しむという判断にも、つねに一理はある（モンテーニュは、「単純で無教養な男」の証言を信頼すると言っている[45]）。しかしそもそも、あたりまえの話であるが、人間の認識能力は有限なのであって、いかに有能な著者にとっても、あるひとつの事件ついてですら、網羅性の観点からも、客観性の観点からも、およそ完全な報告など不可能である。こうして、過去の出来事についての知識はすべて、原理上、蓋然的なものにとどまる[46]。

パスカルが権威の学のなかで特別視する「神学」についてはどうか。パスカルの立場からすれば、神学が依拠する「聖書と教父たち」という権威は絶対であり無謬である。「そこでは権威が真理と不可分であり、権威を通してのみ真理を知りうる[47]。」つまり、聖書と教父の著作に書かれてあることだけが真理であって、そこに書かれていないことはすべて誤り、ということになる。しかし、ことはそれほど単純ではない。聖書を絶対の権威と認めて服従している者同士の間でも、そこに書かれたことがらをめぐって、異なる解釈が生じることがある。たとえば、聖体のなかには実際にキリストの血と肉とが臨在しているのか、それともそれはキリストの血と肉の象徴にすぎないのかという問いは、同じ一節の解釈から生じた問いであるが[48]、そのいずれが正しいかは、その著者以外には答えられない。著者に直接尋ねることができない以上、その判断には別の権威（カトリックにとっては教皇）に従うほかないが、この新たな権威はもはや絶対ではないのである。また、聖書に書かれたことは、字義的に解釈された場合に、かえって著者の意図を曲解することにつながる場合もある。パスカ

45）「私の使用人は単純で無教養な男であったが、これこそが真実の証言を行うのに適した条件である。なぜなら、教養のある連中は、より多くのことがらに、より強い関心をもって注目するが、それらをつい批評してしまう。そして、自分の解釈の価値を高め、その正当性を納得させるために、歴史を少しばかり改竄せずにはおられない。彼らはものごとを決して純粋なままで表現せず、自分がそれらに認めた姿に即してそれらをねじ曲げたり、偽装したりする。しかも、みずからの判断の信を高め、そこに相手の関心を向けようとして、素材に進んでよけいなものを付け加え、引き延ばし、大きくするのである」（*Essais*, I, 31, p. 205）。

46）パスカルが、権威が力をもつ分野として、歴史（histoire）と次に見る神学（théologie）のほかに、地理（géographie）、法学（jurisprudence）、言語（langues）を挙げているのは、現代の観点からすればやや奇異に感じられるが、彼が実際に想定しているのは、「フランス人最初の王は誰であったか、地理学者たちは本初子午線をどこに置いているか、ある死語においてどんな語が使われているか」という問いである（*Sur le traité du vide, Préface*, p. 85）。これらはすべて、歴史的文献に基づいて解決することが期待される問いにほかならない。

47）*Sur le traité du vide, Préface*, p. 85.

48）Voir *16e Provinciale*, pp. 539-567. 次の研究は、カトリックの聖体解釈と『ポール＝ロワイヤル論理学』（第５版）の記号論との関係について、パスカルの表徴論をも参照しながら論じている：塩川徹也『虹と秘跡—パスカル＜見えないもの＞の認識』岩波書店、1993年、II「虹と秘跡—記号から表徴へ」51-121頁。

ルにとっては、旧約聖書のユダヤ人による解釈がまさにそれであった。彼によれば、ユダヤの民は、聖典を虚心坦懐に読んだばかりに、それが約束する富が物質的なものであると勘違いし、到来したキリストを本人であると理解できなかった。キリストは物質的な富ではなく霊的な幸福をもたらしたからである[49)]。このように、書物に書かれたことがそのまま著者の意図を伝えているわけではないという事実は、聖書についても――というより、聖書においてとりわけ――該当するのであり、神学における真理も、人間の力では確定できないはずだ。要するに、「権威の学」のすべてにおいて、人間の知識は有限なままにとどまる。

次に、「理性の学」である。パスカルは、人間と動物の根本的な違いを、前者が「理性」をもち、後者が「本能」しかもたないという点に認め、「［人間の］推論（raisonnement）の結果はたえず増加するのに対して、動物の本能の結果は、つねに同じ状態にとどまる[50)]」と語る。蜜蜂の巣の形は見事な六角形をなしているが、その技術は蜜蜂が学習して得たものではなく、彼らの本能の必要に応えて自然が与えたものにすぎない。これによって本能の欲求が完全に満たされている以上、もはや彼らの知識は増えることがない。だから巣の形は千年前も今も変わらないのだ。「自然は動物たちを、限られた完全性の秩序（un ordre de perfection bornée）のなかに維持することのみを目的としている」のであり、「自然は［…］動物たちがそこになにものかをつけ加えることを許さない[51)]。」これに対して、「無限を目指すように定められた人間」（l'homme, qui n'est produit que pour l'infinité）は、自然によって与えられた知識は限られていても、生涯の間にみずから学び、知識を蓄積していく。自分自身の経験のみならず、過去の人々が蓄えた経験に書物を通じて触れることで、自分のものとすることもできる。推論を働かせ、実験を行うことによって、みずから新しい発見を行うことも可能である。しかもこのような進歩は、人類全体についても言える。とりわけ「理性の学」においては、古代人が与えてくれた知識がわれわれにとっての踏み台の役割を果たしてくれたおかげで、われわれが彼らよりも知識において優越していることは明白だからだ。「それゆえ人間のもつ特権によって、個々の人間が日に日に学問において先へと進むだけでなく、人間全体としても、宇宙が老いるに従って、たえず学問において進歩していく[52)]。」

動物の知識は一定で、個体においても種においても増大することがないのは、彼らにおいて、必要とされている知識と所有している知識が完全に一致しているからだ[53)]。彼らは生得

---

49) Voir S301-B670.

50) *Sur le traité du vide, Préface*, p. 89.

51) *Sur le traité du vide, Préface*, p. 89.

52) *Sur le traité du vide, Préface*, p. 89.

53) モンテーニュが新大陸の食人族において認めたのはこの状態である。彼はこれを理想視している。「なぜなら、彼らはいまも自然の豊かさを享受していて、土地などはいかなる苦労もなしに与えられるのであり、必要なものはすべて十分に豊富にあるので、領地を広げることなど不要なのである。

的な（「自然」が与えた）知識以上のものを求めない。蟻は空を飛ぶための知識を欲しないし、鳥は泳ぐための技術を得ようとしない。彼らは無知であるが、おのれが無知であることを知らない。現状を不幸と感じないかぎり、無知であることの自覚は生じない。一方、人間の知識が無限に増大する可能性をもつのは、彼らが無限の知識欲をもつからだ。人間は知識欲によって諸学問と諸技術を発展させることで、みずからの自然状態を脱した。とりわけ20世紀以降、工学と医学をはじめとする自然科学（「理性の学」）の発展、およびそれに関連する技術の進歩の速度はすさまじく、今や人類自身が、その恩恵とともにその弊害の大きさを見失ってしまっているほどである。だが、学問がたえず進歩するということは、人間にはつねに獲得すべき知識が存在するということであり、つまりは、人間の知恵がいつまでも有限の状態にとどまることを意味する。そして、パスカルにとって有限は、いかに大きな量であったとしても、無限と比べれば無と同じである。「われわれの分として与えられたこの中間が、両極からはつねに隔たっている以上、人がものごとの知識を少しばかりよけいに蓄えたところで、いったい何になるだろう。[...] 彼はつねに究極からは無限に遠ざかっているのではなかろうか[54]。」人間は全知を求めつづけるかぎりにおいて、永遠に無知でありつづける。言い換えれば、学問のたえざる発展を支えているのは、自己の無知を自覚し、それを改善したいという欲求にほかならない。人間の知識も動物の知識も、有限であるという点で根本的な差異はない。違いはみずからの無知を意識し、それを不満と感じるか否かという点だけだ。

「理性の学」は、発見された知識がつねに更新される可能性があるという点からも、人間の知恵の有限性を示す。『真空論序言』においてパスカルは、古代人の誤りが「その推理の力の不足よりも、むしろ幸運な経験の不足」を原因としていると語る。彼によれば、望遠鏡の発明によって無数の小さな星が見えるようになったことから、「銀河の白色の真の原因」が解明され、「月下界の球層の外」にも生成変化があることが一般に認められるようになった。また、これまで真空を出現させる実験が知られていなかった以上、古代人には「自然は真空を恐怖する」と語る権利があったのだ。「彼らが、自然はまったく真空を許容しないと判断したとき、その自然とは、ただ彼らが知っている状態における自然のことのみを言おうとしていたのである。」パスカルはここで、古代人の見解が現代の知見によって修正され、自分たちが真理にたどり着いたと主張しようとしているが、これが行き過ぎであることは明らかである。現時点での結論も、その後の実験や観察によって覆される可能性があるからだ。パスカル自身がこう語っている。「その証拠が、論証によらず、経験によっているあらゆる分野においては、すべての部分、あるいはすべての異なった場合を包括的に列挙するのでな

彼らはいまだに、自然の要求が命じるだけしか欲求しないという幸福な状態にある。それ以上のものはすべて、彼らにとってはよけいなのである」（*Essais*, I, 31, p. 210）。

54) S230-B72, p. 947.

ければ、どんな普遍的な断定もできない[55]」と。『パンセ』のある断章では、「明日も日が昇る」「われわれは死ぬ」という命題すらも「証明」されたわけではなく、習慣によって信じられているだけであるとされている[56]。いかなる命題にも、未来永劫ひとつも反証が現れないという保証はないのである。こと「理性の学」に関して、この「包括的な列挙」が不可能である以上、すべての命題は暫定的な真理にとどまるのである。学問は人間の知識への飢えによって成り立つが、無知なる状況は永遠に根本的な解消を見ない。

2）第一原理の無知[57]

パスカルはさらに、人間の知識の根本的な不確実性について検討を加えている。

> というのも、空間、時間、運動、数が存在するというような第一原理の認識は、われわれの推論によって与えられるいかなる認識よりも堅固である。そして理性は、このような心と本能による認識をよりどころにしなければならないのだし、理性のすべての論述は、そのような基盤の上に構築しなければならないのである。心は、空間には三次元があることや、数は無限であることを感じる。次に理性が、一方が他の二倍になるような二つの平方数が存在しないということを証明する。第一原理は感じられ、命題は結論づけられるが、それぞれ異なった方法によるとしても、すべては確実に行われる。だから、理性が心に、第一原理に合意させたければ、その証拠を差し出せと求めるのが無益でばかげているのと同様に、心が理性に、理性が証明する命題のすべてを受け入れさせたければ、それを感じさせろと要求するのもばかげている[58]。

理性による論証を経ずとも疑いようのない知識が存在する。その典型が「第一原理」や、「いま自分が夢を見ているわけではないこと」であり、それらの確実さを知るのが「心の直感」(sentiment du cœur) または「本能」(instinct) である。「第一原理」とは、「空間、時間、運動、数」など、定義を行わずともそれが指示することがらが明白であるような観念、またはそれらが存在するという命題のことである。

しかし、そのような、われわれにとって疑念の余地がないと思われる認識は、絶対に真と言えるのだろうか。パスカルはこの問題について明確に意識している。

---

55) *Sur le traité du vide, Préface*, p. 91.
56) S661-B252.
57) 本節の記述の多くは次からの抜粋である：山上浩嗣「直感、感覚、繊細さ—パスカルにおける sentiment」『関西学院大学社会学部紀要』104号、2008年、「2. 自然的直感」114-121頁。
58) S142-B282.

懐疑論者たちの主要な強みは、ささいなものを除けば、次の点にある。すなわち、これらの原理が真であることについて、われわれは、信仰と啓示（la foi et la révélation）によらないかぎり、自分のなかでそれらを自然に感じ取るということ以外に、いかなる確実さをも保持していないという点である。ところが、この自然的直感（sentiment naturel）も、そうした原理が真理であるということの確たる証拠にはならない。なぜなら、人間が創造されたのは善なる神によるのか、邪神によるのか、はたまた偶然によるのかという点については、信仰によらなければいかなる確実さもないのだから、これらの原理も、われわれの起源に応じて、われわれに真なるものとして与えられているのか、偽なるものとして与えられているのか、それともいずれとも決められないものとして与えられているのかが疑わしいからである[59]。

「これらの原理」とは「第一原理」のことを指すであろう。われわれがこれを「自然的直感」によって確実であると考えていても、そのことは「信仰と啓示によらないかぎり」確証できない、という。われわれは「空間、時間、運動、数が存在する」ことを感じてはいるが、もしかすると、悪い神がわれわれをあざむき、そのようにしむけているのかもしれない[60]。信仰によれば、われわれはそのような可能性を否定し、人間が善なる神によって創造され、したがってわれわれの「自然的直感」が正しいと結論できるだろうが、そのような神からの「啓示」は限られた人にしか与えられないのであり、その恩恵にあずかることのできない者は、疑いをぬぐい去ることができない。ここで、「信仰と啓示」は、「自然的直感」よりも上位の水準で働いている。後者の確実さは前者によって根拠づけられる。パスカルは、こうした超自然的な霊感を前提としないかぎりにおいて、上のような、懐疑論者から想定される主張の妥当性を認めているようだ[61]。

彼は続けて、「いま自分が夢を見ているわけではないこと」という命題の確実さについて検討する。「また、だれも――信仰によらなければ――、自分が目ざめているのか眠っているのかということについては確証できない。人は眠っている間でも、われわれがいまそう信じているのと同じようにはっきりと、目がさめているものと信じているのだから。目ざめて

---

59) S164-B434, p. 898.

60) Cf. *Méditations métaphysiques,* in Descartes, *Œuvres philosophiques*, éd. F. Alquié, Paris, Bordas, « Classiques Garnier », tome II, 1992, « Première Méditation », p. 412.

61) パスカルは『エピクテートスとモンテーニュとに関するド・サシ神父との対話』において、この懐疑論者的立場をモンテーニュのものとしている（*Entretien avec M. de Sacy sur Épictète et Montaigne*, p. 722）。

いるときと同じように、空間、形、運動を見ていると信じ、時が流れているのを感じ、それを計り、行動するのである。」そうである以上、「われわれには真理の観念が一切ない。」われわれには覚醒の状態と眠りの状態との区別がつかないのであり、眠っている間に「われわれが感じること（sentiments）はすべて幻想」だからである。したがって、人間が自然的直感を通じて知ることがらの真理性に、絶対的な根拠はない。われわれはそれらを真理であるとみなしているにすぎない（民衆が法を真の正義と錯覚して服従しているように）。

このような懐疑論に対し、パスカルは独断論者の立場から反論できるものと考えている。彼は言う。「独断論者たちの唯一の砦に注目しよう。それは、善意をもって（de bonne foi）、誠実に（sincèrement）語れば、自然的な諸原理を疑うことはできない、ということである[62]。」真理の認識に際しては、「善意」や「誠実さ」という、ある種の心構えを要する。自然的直感の確実さに、形而上学的な根拠を与えることはできない。だからといってこれによって与えられる認識がただちに偽と判断されるべきでもない。なぜなら、懐疑論者たちも、そのような認識を心底から疑っているわけではないからだ。

> 人間はすべてを疑うのだろうか。自分が目ざめていること、つねられていること、焼かれていることを疑うのだろうか。自分が疑っていること、存在していることをも疑うのだろうか。ここにまで至ることはできない。私は断言するが、いまだかつて実際に完全な懐疑論者など存在したことはない。自然が無力な理性を支え、ここまではめをはずすのを妨げてくれるのである[63]。

本来疑うことのできない「自然的諸原理」を疑ってみせる人々は、懐疑論者を気取っているにすぎない。本物の懐疑論者など存在しなかったし、存在しえない。その意味で彼らは、本心を偽っている。したがって、ここでの「善意」や「誠実さ」とは、自己の本心に対する忠実さのことである。思い上がりや虚勢を排し、虚心に自己の心を見つめれば、自明な真理を疑うことなどできないはずだ。

もっとも、パスカルはこれによって、おのれの不誠実さに無自覚な懐疑論者たちを批判するものの、それと対立する独断論者の立場そのものを擁護しているわけではない。彼にとって、独断論者は人間の理性によって真理にたどり着くことができると信じる人々である。上にも見たように、パスカルはこのような考えを明確に否定している。パスカルは別の断章で、独断論者の置かれた苦しい立場を次のように描き出す。

---

62) S164-B434, p. 899.
63) S164-B434, p. 900.

良識（Le bon sens）。

彼ら［独断論者たち］は、こう言わざるをえない。「あなたがた［懐疑論者たち］は善意によって（de bonne foi）行動していない。われわれはいま眠ってなどいない」などと。この思い上がった理性［独断論者の理性］が、いやしめられ、哀願しているのを見るのが、たまらなく好きだ。なぜならこれは、自分の権利が脅かされ、それを手に武器と力をもって防衛している人間の言葉ではないからだ。そんな人ならば、相手が善意から（de bonne foi）行動していないなどと言って楽しむのではなく、そのような不誠実を力で罰するものである[64]。

パスカルは、「善意」などというあいまいな根拠によってしか懐疑論者に対抗することのできない独断論者のふがいなさを告発し、独断論者の理性の思い上がりを攻撃する懐疑論者の姿勢を評価している。しかし、善意によって行動すればわれわれがいま目ざめていることは確実だと認められるはずだとの独断論者の考えそれ自体は承認しているようだ。パスカルは、懐疑論者の「不誠実を力で罰する」べきであるとし、疑いえない自然の認識の存在をもっと強力に主張する必要性を説く。その方法については明言されないが、もちろんパスカルが念頭に置いているのは、「信仰と啓示」であろう。この方法を用いることができるのは、正しく神に心身を捧げている人々（あるいは神自身）だけである。

「善意」なる心理学的根拠と、「信仰と啓示」という限られた人にのみ与えられる神秘的根拠を除けば、自然的直感の正当性を確証する手段は、人間にはいっさい備わっていない。そのかぎりで、第一原理や原始語（mots primitifs[65]）の観念といった自然的諸原理は、デカルトのコギトのような形而上学的な真理ではなく、暫定的真理――A・マッケンナの言葉では、「真実らしさ」（vraisemblance）――とでも呼ぶべきものである。人間が独力で認識できる真理には、つねにこのような限界が刻み込まれている。パスカルは、このような事態の原因を、精神と身体からなる人間の存在論的条件に見ている。

われわれの魂は、身体のなかに投げ込まれて、そこで数、時間、次元を見いだす。魂はそこから推論し、それを自然、必然と呼び、ほかのものを信じることができない[66]。

64）S85-B388.

65）「空間」「時間」「運動」「等しさ」「多数」「減少」「全体」など、自然によってすべての人々に明らかな状態で与えられているため、これ以上定義しようのない共通の観念（またはそれを指示する語）のこと。Voir Pascal, *Réflexions sur la géométrie en général*, pp. 114-115.

66）S680-B233, p. 1208.

マッケンナが言うように、デカルトにおいては、コギトの純粋な思考が無限で必然的な存在を確証する。彼の「方法」は、精神を感覚から離脱させ、明証的直観（intuition évidente）へと上昇させることによって成立する。これに対して、「心の直感」を「本能」――身体的・動物的原理――と同一視するパスカルは、決して純粋な思考が身体を離れて行使されるとは考えない。「心の直感」にゆだねられる自然的諸原理の認識は、身体との合一によって純粋な判断を妨げられた精神のもつ限界を示している[67]。その意味で第一原理は、暫定的な真理、人間的な真理でしかない。真の「第一原理」は、われわれには知ることができない。「われわれのもっている存在（Ce que nous avons d'être）が、第一原理の認識をわれわれからそらせている[68]。」このように言うとき、パスカルが念頭に置いているのは、身体と一体化した人間の精神のありかたにほかならない。われわれのあらゆる推論の土台となる第一原理の真理性に対する無知は、われわれが身体をもつという事実に起因するのである。

3）知恵と謙遜

「権威の学」の対象となることがらにおいて、著者の証言の信憑性と、その証言の解釈の正当性は確証できない。また「理性の学」において、現在のいかなる知見もつねに更新される可能性がある。他方、もっと根本的に、人間のあらゆる認識の基礎となる第一原理が純粋な虚妄でないという確実な証拠はない。以上から、学問において人間がなすあらゆる発見は永遠に「真実らしい」ものにとどまる。このときパスカルにとって、政治の分野において、正義の探究をあきらめ、立法者の恣意によって打ち立てられた規則に従うことが賢明であったように、学問の分野においても、民衆の謬説に満足することは正しい選択となる。

> あることがらの真実を知らないとき、人間の精神を固定する共通の誤りがあるのはよいことだ。たとえば、季節の移り変わりや、さまざまな病気の進展を月のせいだと考えるような誤りである。なぜなら、人間の主たる病は、自己が知りえないことがらに対する飽くなき好奇心だからだ。だから、人間にとって、こうした無益な好奇心よりは、誤解のなかにいるほうがまだましなのだ[69]。

67）Antony McKenna, *Entre Descartes et Gassendi. La première édition des* Pensées *de Pascal*, Paris, Universitas ; Oxford, Voltaire Foundation, 1993, pp. 30-40.

68）S230-B72, p. 946.

69）S618-B18.

好奇心（curiosité）は、キリスト教の三邪欲のひとつである「目の欲」（concupiscence des yeux）あるいは「知る欲」（*libido sciendi*）と同一視される[70]。好奇心の罪深さは、人間が宇宙全体の真理を探り当てることが永遠にない以上、決して満たされることがないという点にある。だが、それだけではない。人間の好奇心は、それによって知りえたことを他人に伝えて誇りたいという欲望によって支えられている。このとき好奇心は、最大の邪欲である「支配欲」（*libido dominandi*）、あるいは「傲慢」（orgueil）に変貌する。

> 傲慢。
>
> 好奇心はたいていの場合、うぬぼれにほかならない。人がなにかを知りたがるのは、それについて人に語って聞かせるためである。さもなければ、だれも航海などしないだろう。人になにも語らず、単に見る楽しみのためだけで、人に伝える希望がまったくないならば[71]。

人間はいくら知識を蓄えたところで、全知からは無限に隔たった状態にとどまる。また、そのような知識のひとつひとつは永遠不変の真理ではありえない。であれば、そのような知恵を誇ることにいかなる正当な理由もない。そのような者は、法律が無根拠であることを知っていることを誇りたいばかりに民衆にそのことを告げ、国家に悪弊をおよぼす「生半可な知者」に似ている。学問の分野においては、「哲学者」と呼ばれる人々が彼らに相当する。

> 哲学者たち。
>
> 彼らは、神だけが愛され、崇められるに値すると信じながら、人々から愛され、崇められたいと願っている。しかも、おのれの堕落を知らないのだ[72]。

---

70) S460-B458, p. 1087. E・ビュリーによれば、17世紀において「好奇心」（curiosité）は、宗教の観点からだけでなく、世俗の美意識という観点からしても、批判の対象であった。『オネットムあるいは宮廷で好まれる術』（*L'Honnête Homme ou l'art de plaire à la cour*, 1630）の著者ニコラ・ファレ（Nocolas Faret）は、「過度な好奇心をもつ病的な精神」« les esprits malades de trop de curiosité » を断罪している。この姿勢は、ラブレーとモンテーニュが行った「衒学」（pédantisme）批判（*Gargantua*, XXI-XXII ; *Essais*, I, 25 *et al.*）から派生しているとも言える。「オネットム」たるもの、古典古代の著作から得られた知識は、ひけらかすのではなく、自己の内部に取り込み、あたかも生来身についたもののように見せることが理想とされた。ラ・ロシュフコーは「オネットム」を「なにも鼻にかけない」« qui ne se pique de rien » 人物と定義している。次を参照：Emmanuel Bury, *Littérature et politesse. L'invention de l'honnête homme 1580-1750*, Paris, PUF, 1996, pp. 54-66.

71) S112-B152.

72) S175-B463.

哲学者は、みずからの無知を知らぬどころか、おのれを神に等しい存在とみなす思い上がりに陥っている[73]。それでいて、無益なことがらの探究にばかり時間を費やし[74]、肝心な問題については語らない[75]。哲学は、気晴らしと割り切るならよいが、まじめに取り組むに値しない。パスカルは言う。「彼ら［プラトンとアリストテレス］が法律や政治の著作に興じていたときには、ふざけていたのだ。それは彼らの生涯で、もっとも哲学者らしくなく、もっともまじめではない部分であった。もっとも哲学者らしい部分とは、単純に、平穏に生きることであった[76]。」ここで「哲学」は、知恵の探求という本来の意味から、そのような知恵を軽んじること、知性の働きとは無縁ななんらかの活動――瞑想、労働――に専心することという反対の意味へと変化している。『パンセ』の有名な次の一節は、この文脈のなかで理解することもできる。「哲学を馬鹿にすること、これこそが真に哲学することだ[77]。」

ただしここで注意すべきは、パスカルが考えるあるべき知性のありかたが、まったくの無知の状態、すなわち動物の置かれた「自然なる無知」とは異なるという点だ。パスカルは、知識を蓄えた状態に甘んじ、そのことで他人に優越しようとする欲望を罪とみなすが、知恵を探求する行為そのものを否定しているわけではない。彼が模範としているのはここでも、その名こそ出さないが、最高の知恵者でありながら、おのれの無知を自覚するソクラテスである[78]。人間の到達しうるかぎりの知恵をもち、あらゆる学問に通暁しながらも、そのよう

73）『サシ神父との対話』では、エピクテートスがそのような哲学者の典型とみなされている。Voir *Entretien avec M. de Sacy sur Épictète et Montaigne*, pp. 720-721.
また、『パンセ』の「哲学者たち」（[X] Philosophes）および、「至高善」（[XI] Le Souverain Bien）の章においても、とりわけストア派の哲学者たち（ゼノン、セネカ、エピクテートス）の思い上がりが批判や皮肉の対象となっている。ここには、アウグスティヌスとジャンセニウスからの影響を認めることができる。次を参照：Chiara Catalano, « Remarques sur le fragment L 147 : Pascal et Jansénius contre les stoïciens », in *Courrier du Centre international Blaise Pascal*, n° 34, 2012, pp. 7-12. なお、パスカルとストア主義については次を参照：Vincent Carraud, *Pascal et la philosophie*, Paris, PUF, 1992, pp. 201-213.

74）パスカルのデカルト批判はこの点にある。Voir S118-B79, S462-B76, S445-B78.

75）S28-B220 :「魂の不死について論じなかった哲学者たちの誤り。」

76）S457-B331.

77）S671-B4. パスカルの修辞論との関連におけるこの一節の解釈について、次を参照のこと：山上浩嗣「直感、感覚、繊細さ—パスカルにおけるsentiment」前掲論文、126-129頁。
モンテーニュは、「哲学」を「われわれに生きる術を教えるもの」と定義した上で（« la philosophie est celle qui nous instruit à vivre », *Essais*, I, 26, p. 163）、それを「学芸」（les arts）や「学問」（science）と分離し、「無知」（ignorance）と結びつけている（*Ibid.*, pp. 167-168）。

78）パスカルは『パンセ』のなかで一度だけソクラテスに言及している。ただしそこでは、プラトンとならぶ知恵者でありながら、異教徒を回心に導くだけの説得力をもちあわせない人物として登場する。S690-B769, p. 1233 :「異教徒たちの回心は、救世主の恩寵だけにゆだねられていた。ユダヤ人は、異教徒と長きにわたって戦ったが、うまくいかなかった。ソロモンや預言者たちがそれにつ

な営みの空しさを悟る姿勢は、政治の分野において、「裏の考え」をもって民衆の愚かさを肯定する「知者」に通じる。

比類のない知恵と賢慮を湛えながら、みずからを無知で卑小な存在と位置づけること、そしてもっとも光を欠いた「民衆」の「愚かさ」を、秩序の平穏という理想に照らして称賛すること。これが、パスカルの考える真の君主と真の哲学者に共通する条件である。このような「賢明なる無知」の状態を「自然なる無知」の状態と分つのは、「謙遜」という契機の有無である。学問的知識はすべて蓋然的に真であるにすぎず、学問という営みは気晴らし以上の有用性をもたない。学問は、のちにその空しさを悟るためにのみ真剣に取り組まれるに値する。謙遜とは、前人未到の高みに立つものにして真に可能な徳だからである。そしてまた、謙遜とは傲慢という罪の対極にある状態であり、先にパスカルの貴族の子弟に対する助言によって見た通り、自己の優越（したがって自己愛）ではなく他者への愛（charité）を可能にするだろう。言うまでもなく、「愛」とは富や権力、知性の優越を無限に超越した、キリスト教においてもっとも重要な徳である。パスカルが、知恵と謙遜の両立、「賢明さ」（sagesse）と「愚かさ」（folie）の共存を、宗教そのものに内在する特質と認めているのは、そのためである。

> 奇蹟。神聖無垢で完璧、賢明かつ多数の証人。殉教者。ダヴィデをはじめとする即位した王たちおよび王族イザヤ。――これらすべてにおいて偉大であり、加えて知識において偉大であるこの宗教は、あらゆる奇蹟とあらゆる知恵とを披露した上で、それらすべてをどうでもよいものとみなして、こう語る。自分には知恵も賢（さか）しさ（signe）もない、あるのはただ十字架と愚かさだけだ、と[79]。

政治（「身体の秩序」）および学問（「精神の秩序」）においてあるべき知恵の形とされた「賢明なる無知」はこうして、宗教（「愛の秩序」）における人間の道徳に深く関係している[80]。

いて語ったことは、すべて無益だった。プラトンやソクラテスのような賢者も、彼ら異教徒たちを説得するには至らなかった。」パスカルのソクラテス主義は、興味深い主題である。次を参照：Hirotsugu Yamajo, *Pascal et la vie terrestre. Épistémologie, ontologie et axiologie du « corps » dans son apologétique*, in *Memoirs of the Graduate School of Letters, Osaka University*, vol. LII-II, mars 2012, pp. 389-390, note 3.

79) S323-B587. Cf. S427-B588 :「われわれの宗教は賢く、かつ愚かである（Notre religion est sage et folle）。賢いというのは、もっとも知恵に富み、奇蹟、預言などの上にもっともしっかりと立っているからだ。愚かだというのは、人をそこに導くのは、これらのもののいずれでもないからである。」

80) キリスト自身が「十字架の上での死を選ぶまでに、へり下った神」« un Dieu humilié, et jusqu'à la mort de la croix »（S273-B765, Cf. S285-B679）である。

では、自己の死後の運命という宗教に関わる問題に対する無知に対して、人間はどのようにふるまうべきなのか。次にこの点について見よう。

３. 自己の運命に関する無知

１）気晴らしにふける人間

パスカルにとって人間の「悲惨」は、いつか死んでしまうことにあり、人間の「偉大」は、「自分が悲惨であることを知っている」点にある[81)]。彼が「われわれの尊厳のすべては思考にある」と言うとき、その「思考」とは、早晩訪れる自分の死に思いを致すこと、さらには、その後のみずからの行く末について考えることである[82)]。パスカルはこの自己の死を、人間の無知を構成する最大のものとみなしている。

> 私が知っているのはただ、自分がまもなく死ぬ定めにあるということだけだ。だが私の知らない最たるものは（ce que j'ignore le plus）、まさに私が避けることのできないこの死そのものである[83)]。

人間はこの最大の無知の解消の努力を怠り、「踊ること、リュートをひくこと、詩をつくること、輪取り遊びをすることなどなど、あるいは、戦うこと、王になることを考えている[84)]。」これがパスカルの考える「気晴らし」（divertissement）の状態である。彼はこの、おのれの悲惨から目をそらそうとする状態をこそ「悲惨の極み」（la plus grande de nos misères）と位置づける。「なぜならこれこそが、われわれが自分について考えることをさまたげ、われわれを知らず知らずのうちに滅ぼしてしまうからだ[85)]。」

「われわれを知らず知らずのうちに滅ぼしてしまう」とはどういうことか。また、なぜそれが問題なのか。パスカルの説明を聞こう。

> この世で生きる時間は一瞬にすぎず、死の状態は、それがどんなものであるにせよ、永

81）S146-B397.

82）次の拙論では、「人間の尊厳」をなすこの「思考」が、神ありへの「賭け」にほかならないことを示した：山上浩嗣「パスカルにおける人間の尊厳」『人間の光と闇—キリスト教の視点から』「キリスト教の視点からの人間の尊厳と深淵」研究センター・向井考史編著、関西学院大学出版会、2010年、105-125頁。

83）S681-B194, p. 1221.

84）S513-B146.

85）S33-B171.

> 遠であるということ。したがって、この永遠の状態がどうあるかによって、われわれのすべての行動と思考とは、まったく別の道をとらなければならないこと。そして、われわれの究極の目的であるはずのこの一点によっておのれの歩みを律しないかぎり、ただの一歩も良識と分別をもって踏み出すことはできないこと。以上のことに、疑いの余地などない[86]。

気晴らしとは、将来の幸福を棚上げにして、今このときの快楽を追求する生き方である。ところで、肉体をともなうこの世の生涯はせいぜい百年であるのに対して、肉体をともなわない魂だけの生があるとしたら、その状態は永遠に続くかもしれない。もしそのような彼岸の生が存在するのなら、それを幸福なものとするために、此岸での生をどのように送るべきかを知ることに努めなければならない。同時に、これを怠ることで、永遠の悲惨に苦しむような結果になることは、なんとしても避けなければならない。みずからの死から目をそらし、狩り、賭けごと、社交、戦争、学問などに夢中になっている人間はみな、無限の至福を、それと比較すれば一瞬で終わるはかない幸福のために犠牲にしているか、取るに足らない今ここにある快楽に溺れるあまり、知らず知らず永遠の劫罰へと近づいているかのいずれかである。

そこで、あらゆる人間が関心をもたざるをえないこの問題について手がかりを与えてくれるのが宗教、とりわけ、神が存在し、教えに従って正しい生をこの世で送った者には魂の永遠の生が約束されている、と説くキリスト教である。であればまず、ことの順序として、この宗教が提示するみずからの証拠を検討し、その教えが真実なのかでたらめなのかを考えてみることから始めるのが当然のことではないか…。

以上がパスカルの主張である。自己の運命に関する無知は、もっぱら宗教に解決がゆだねられる事態なのだ。にもかかわらず、彼が見いだす現状はこうである。

> 彼ら［人間たち］は、その証拠が目の前にあるのに、それを見つめることを拒む。そして、このような無知のなかにあって彼らは、もしその不幸［永遠に続く悲惨な来世のこと］が存在する場合には、そこに陥るのにおあつらえむきの道を選んで、死に臨んでそれがどんなものか味わってみることを期待しているのである。それでいてその状態にすっかり満足し、それを公言し、さらにはそれを得意がる始末なのだ[87]。

---

86) S682-B195, p. 1226.
87) S682-B195, pp. 1226-1227.

気晴らしに興ずる人間たちは、自己の死後の運命という問題そのものを知らないか、知っていてあえて関心を向けようとしない。彼らは「無知のなかに安住している」状態にある。彼らはおのれの「愚かさ」（folie）を知らないのである[88]。

2）パスカルの仮想的対話者

『パンセ』のなかには、いわゆる「賭け」の断章（S680-B233）を典型として、パスカル本人の立場を代弁すると思われる護教論者と、キリスト教を真っ向から否定はしないものの、信仰をためらう人物との対話からなる断章がいくつかある。セリエ版で「神の探求へと誘う手紙」と題された章に含まれる断章S681-B194にも、このような仮想的対話者が登場する。この人物の発言の一部を引用しよう。

> 私は、だれがいったい私をこの世に置いたのか、この世が何であるか、私自身が何であるかを知らない。私は、すべてのことについて、恐ろしい無知のなかにいる。私は、私の身体、私の感覚、私の魂、そして私のうちのまさにこの部分、すなわち私のいま言っていることを考え、すべてのことと自分自身とについて反省し、しかも他のことについてと同様に自分自身をも知らないこの部分、これらのものが何であるかを知らない。私は、自分が閉じ込められている宇宙の恐ろしい空間を見る。そして自分がこの巨大な広がりの片隅につながれているのを見るが、なぜほかのところでなくここに置かれているか、また私が生きるべく与えられたこのわずかな時間が、なぜそれ以前にあった永遠のすべてと、それ以後に来る永遠のすべてのなかのほかの一点ではなく、この点に割り当てられたのかということを知らない[89]。

この人物が抱いているのは、自分をなす身体や魂について、自分の置かれた場所と時間についての問いである。彼は、自己にまつわるもっとも根本的なことがらさえも知らないことを自覚している。このような疑問は、宗教の提起する問いへと発展していく。

> 私は、自分がどこから来たのかも、どこへ行くのかも知らない。私の知っていることはただ、この世から出れば、虚無のなかか、怒れる神の手中に未来永劫陥るということ

88) S682-B195, p. 1227 :「このように無知のなかで安住すること（Ce repos dans cette ignorance）は、不可解極まることである。そのように生涯を送る連中には、それがいかに途方もなく馬鹿げたことかを、自覚させてやならければならない。また、彼らにその異様さを思い知らせることで、おのれの愚かさを見つめさせて（par la vue de leur folie）、彼らを混乱に陥らせてやらねばならない。」

89) S681-B194, p. 1221.

であり、この二つの状態のいずれが永遠に与えられることになるのかということも知らない。これが私の、きわめて無力で不安定な現状である[90]。

この対話者は、来世の存否という問題について明確に意識している。また、彼の発言には、もし来世が存在する場合、自分が与る永遠の生が幸福なものとなるのか、悲惨なものとなるのかが、「怒れる神」の意思にゆだねられるということも示唆されている。この人物は、自分がこの大切な問題について「恐ろしい無知」のなかにあること、そしてその問題を探求する必要があることは理解している。本章冒頭で引用した次の一節も、実はこの対話者の発言である。「私が知っているのはただ、自分がやがて死ななければならないということだけである。だが私の知らない最たるものは、まさに私が避けることのできないこの死そのものである。」ここまでを見ると、この仮想的対話者は、いずれ迎える死について意識しているという点で、「気晴らし」にふける人々とは明らかに一線を画している。しかし、彼はここで突如として開き直り、問題解決への努力を放棄することを宣言する。

そして、以上すべてのことから、私はこう結論する。生涯のすべての日々を、やがて自分の身に何が起こるかなど考えずに過ごすことだと。私の疑問について、ひょっとするとなんらかの光を見いだすことができるのかもしれないが、そのために骨を折りたくはないし、その光を求めるための一歩を踏み出したくもない。しかるのちに、このような心配で頭を悩ませている連中を鼻で笑ってやりながら、なんの予測もなんの恐れもなく、あの大事件に挑んでみたい。そして、未来の永遠の状態がどんなものかについてはよくわからないままで、ふんわりと死まで運ばれてみたいものだ[91]。

この人物は、みずからの行為が自己の運命から気をそらすためになされていることすら意識しないような、純然たる無知の状態とは異なり、自己が無知であることを知っている。政治における無知の知は、「裏の考え」によって民衆の無知に発するふるまいを肯定し、結果的に国家の平和の維持に貢献する賢慮につながっていた。また、学問における無知の知も、無益な好奇心を抑制し、自己の分際をわきまえることで謙遜な姿勢を保つものとして、望ましい状態であるとみなされていた。これに対して、ここでのパスカルの対話者は、自己の運命に関する真理については知ることができないという認識そのものを誇り、苦心してそのような真理を探求する人を小馬鹿にする。彼岸の生が悲惨なものとなる可能性を知りながら、わ

90) S681-B194, p. 1221.
91) S681-B194, pp. 1221-1222.

ざと「ふんわりと死まで運ばれてみたい」と語るのは、罪と知りながら罪を犯す確信犯のふるまいにほかならず、それだけいっそう始末が悪い。このような態度にはさらに、強がりによって人から称賛を得ようとする倒錯した自愛心すら疑われる。この人物は、謙遜を心得る「賢明なる無知」の状態とはほど遠い。むしろ、知ったかぶりをする「生半可な知者」に近いと言えるだろう[92)]。

3）心を尽くして求めること

では、自己の死とその後の運命に関する「無知」の状況に対して、正しい態度は何だろうか。それは、疑いのなかにあってもなお探求すること、である。

> この疑いのなかにあることは、たしかに大きな不幸である。しかし、この疑いのなかにあるときに、最低限不可欠の義務は、探求するということである。だから、疑いながらも探求しない者は、ひどく不幸であると同時に、ひどく不正である[93)]。

ここで「疑い」とは、来世の存在についての疑い、あるいは「魂の不死」についての疑いのことである。いずれであっても、デカルトにとってとは異なり[94)]、それらはパスカルにとっては論証によって解決可能な問題ではない。彼は言う。「私はここで、神の存在、三位一体、霊の不死など、すべてこの種のことがらを、自然的な理由によって証明しようとは企てない。それは単に頑迷な無神論者を説得しうる手段を自然界に見いだすだけの力が私にないと思うからではない。そのような知識は、イエス＝キリストなしには無益で不毛だからであ

---

92)「哲学者たち」は、学問においてそうであったように、人間とは何かという宗教に関わる問いについても「生半可な知者」である。パスカルによれば、哲学者は「人間の過去の偉大さ」を教えることで彼らを「傲慢」orgueilに導くか、「人間の現在の弱さ」を説くことで、彼らを「絶望」désespoirと「無気力」paresseに陥れるかのいずれかである（S240-B435）。これに対して、「キリスト教だけがこれら二つの悪徳［傲慢と無気力］を癒すことができた。地上の知恵は一方をもって他方を取り除こうとしたが、それとは異なり、福音の単純さによって、双方をともに退けたのである」（S240-B435 ; Cf. S153-B418, S683-B431）。

93) S681-B194, p. 1220.

94) デカルトは『省察』冒頭のソルボンヌに宛てた書簡のなかでこう述べる：「私はつねにこう考えてきました。神についての問題と魂についての問題との二つは、神学によってよりはむしろ、哲学によって論証されなければならない問題の最たるものである、と。というのも、私たち信仰者にとっては、神が存在することと、人間の魂が身体とともに滅びるものではないということは、信仰によって信じるだけで十分ですが、不信仰者の場合は、あらかじめこの二つのことを自然的理性によって証明してからでなければ、いかなる宗教も、また一般に、いかなる道徳も、彼らを説得することはできないと思われるからです」（Descartes, *Méditations métaphysiques*, éd. cit., « À Messieurs les Doyens et Docteurs de la Sacrée Faculté de Théologie de Paris », p. 383）。

る[95]。」ここでパスカルが求めている義務は、理性によっては原理的に解決不可能な問いを前にして、それでもなお解決のために努力することにほかならない。では、そのような探求はいかにして可能なのか。

それは、直前の引用によって示唆されているように、信仰によってである。パスカルが言いたいのは、「来世の存在」および「魂の不死」という命題は信の対象であって、それらに対する「疑い」は、それらを真とみなす宗教の権威への信頼によってしか晴れることはない、ということである。こうして、自己の死後の運命の探求という課題は、神の探求へと帰着する。

> そして、正しい（raisonnables）と言いうるのは、神を知っているために心を尽くして神に仕えている人々と、神を知らないために心を尽くして神を求めている人々の二種類しかいないということを、認めてもらいたい[96]。

自己の運命に関する無知という状態は、解決せずともこの世の生になんら支障をきたさない。それどころか、今この瞬間の楽しみに集中するためには、自分が死ぬという必然から目をそらすほうが得策だ。そうして人間のある者は無意識のうちに、ある者は意図的に、みずからの運命について考えるという「人間の尊厳」を放棄して、日々をさまざまな活動で満たしている。パスカルはこのさまを「気晴らし」と呼んで断罪している。彼にとって「気晴らし」は、自分を知らず知らずのうちに永遠の不幸へと導く恐ろしい倒錯である。もし魂が永遠に不死であり、肉体の死後の彼岸の生が此岸における行いに応じて決まるとするならば、ささいな快楽を求めて犯した罪によって、永遠の劫罰に定められる可能性もあるからだ。したがって、自己の運命に関する無知については、絶対に放置してはならない。正しいのは、いかなる手がかりもないがしろにせず、真理を求めつづける、という態度である。この探求はしかし、科学的真理の探求のように、理性と感覚を用いて行われる性質のものではない。魂の不死、彼岸の存在、さらには神の存在という命題の真理性は、それを説く宗教の権威に対する信によってしか確証しえないからだ。結局のところ、自己の運命に関する問いは、「心を尽くして神を求める」ことによってしか解決しないし、人間の義務もこの点にある。宗教に関わる真理の探究に関しては、「無知のなかの安住[97]」は許されないのである。

> 三種類の人々しかいない。第一に、神を見いだしたのでこれに仕えている人々。第二

95) S690-B556, p. 1235.
96) S681-B194, pp. 1224-1225.
97) S682-B195, p. 1227. 注88を参照。

に、神を見いだしていないので、これを求めることに専心している人々。第三は、神を見いだしてもおらず、求めもせずに生きている人々。最初の人々は、正しくかつ幸福である（raisonnables et heureux）。最後の人々は、愚かでかつ不幸である（fous et malheureux）。中間の人々は、不幸だが正しい（malheureux et raisonnables）[98]。

「正しくかつ幸福な」人々、「不幸だが正しい」人々、「愚かでかつ不幸な」人々。パスカルはここで、第一の人々と第二の人々の間の距離よりも、第二の人々と第三の人々の間の距離を決定的なものとみなしているのは明らかである。後者の隔たりがまさに、「求める」という行為の有無を画しているからだ。彼がより大きな価値を認めているのは、「幸福であること」ではなく「正しいこと」であり、彼にとって避けなければならないのは、「不幸である」よりもむしろ「愚かである」ことである。

だが、この「正しいこと」とはどのような意味だろうか。原語の raisonnable は、「理性に照らして正しい」「理にかなっている」ということだ。「愚かだ」の原語 fou は逆に、「合理性を欠いた」「無謀だ」「軽率だ」を意味する。自己の死後の運命に関する無知を解消しようと努力すること、ひいては神を心から求めることが、いかにして「理にかなった」態度と言えるのだろうか。

4）「神あり」への賭けと地上の生

これについては、パスカルのよく知られた「賭け」の議論が手がかりになる。この議論の解釈については、別の拙稿[99] で詳しく述べた。その要点は次の通りだ。

神が存在する可能性が少なくともゼロでないとすれば、「神を信じること」は、コイン投げの賭博で「表」が出ることに賭けることに喩えることができる。参加料は「ひとつの生命」すなわちみずからの生涯全体だ。表に賭けて勝てば（肉体の）死後に（魂の）永遠に幸福な生が得られるのに対して、裏に賭けて勝っても配当はゼロである。この場合、一見「表」以外の選択肢はない。だが、よく考えてみると、「表」に賭ける人生と「裏」に賭けて過ごすこの世の生涯は、同じものではありえない。前者はみずからの自由を犠牲にして厳格な教義に従うと決意する人生であり、後者は、なにものにもとらわれない気楽な生だ。つまり、「裏」を選ぶということは、事実上参加料を支払わないのと同じことなのだから、結局のところこの賭博に参加しないことを意味する。おまけに、「表」に賭けて、神の目から見て正しい生活を送るために粉骨砕身の努力を試みたところで、神がどう判断するかは人間には不可知

98）S192-B257.
99）山上浩嗣「パスカルにおける人間の尊厳」前掲論文。

である以上、その賭けに勝つかどうかは不明なままである。この賭博はもはやコイン投げのゲームではなく、合格すれば大きな成功が約束されてはいるが、選抜がきわめて厳しい試験に似ている。予想される大変な努力を避けてそんな試験にはじめから挑まないという選択がありえるのと同様、この賭けに参加しないこと、あるいは「裏」に賭けること――これらは同じことだ――も、愚かな選択と切って捨てるわけにはいかない。

しかしパスカルは、おそらく上のような反論を見越して、次のように述べる。

> 言っておくが、君はこの世にいる間にその賭けに勝つだろう。そして、君がこの道で一歩を踏み出すごとに、勝利が確実であることと、賭けたものが無に等しいこととをきわめてよく悟るあまり、ついには、君は確実かつ無限なものに賭けたのであって、そのためになにも手放さなかったのだということを知るだろう[100]。

賭けという行為、神の存在を信じて、その意にかなった生活を送ろうと努力する姿勢そのものが、当の努力が正当であると感じさせ、やがては勝利を確信させるようになる、ということを、この一節は言おうとしている。「表」を選ぶ生涯は、その勝利の結果を見る前にすでに、いやむしろ、その結果のいかんにかかわらず、「裏」を選んで生きるよりも幸福だ、というのである。上の喩えにもどれば、困難な試験に挑む者は、努力を重ねれば重ねるだけ、みずからが合格に近づいているという確信を得られるのであって、彼はその試験を受ける前から、まさにそのような確信によって幸福だ、ということになる。荒唐無稽な主張と思われるだろうか。

だが、次を見よう。

> 次のことにはたして疑う余地があるかどうかを答えてほしい。すなわち、この世においては来世を望むこと以外に幸福はなく、人はそれに近づくにしたがってのみ幸福であること、そして、その永遠について完全な確信をもっている者にとってはもはやなんの不幸も存在しないのと同様に、それについていかなる光ももたぬ者にとっては幸福などまったく存在しないということだ[101]。

パスカルは、みずからの死後の幸福の可能性に無関心で、現世のつかの間の幸福だけを求めて生きる人々のありかたを「気晴らし」と呼んでいた。彼にとって、気晴らしによってその

---

100) S680-B233, p. 1215.
101) S681-B194, p. 1220.

瞬間だけ幸福になれるという事実自体に、人間の悲惨がある。人間の真の幸福とはしたがって、未来の永遠の幸福を求めて生きること以外にはありえない。そのような至福は、現世の生涯においては決して与ることができない。地上においてわれわれに許されているのは、その至福を望むことだけである。だがその「希望」（espérance）こそが、すでにしてこの世で人間が与えられる最大の幸福なのである。パスカルは、来世の魂の生が幸福であることを願い、そのような生に近づいているという確信そのものが、まさに現世における最大の恩恵であると主張しているのである。

このように考えると、上でパスカルが、「神を求めることに専心している人々」を「正しい」（「理にかなっている」）と評価していた理由が理解できるであろう。パスカルからすれば、そのような人々は、いわば損得を冷静に勘定した上で、より利得が大きい選択をしていることになるのであり、逆に、「神を求めずに生きる人々」は、「気晴らし」によって得られるささいな快楽を幸福と勘違いしているうちに、将来の永遠の悲惨に近づいているかもしれないことをもって「愚か」（「無謀だ」）と形容されるのである。後者は「瞬間」のために「永遠」を犠牲にしているのだ[102)]。

また、パスカルは「神を見いだしていないので、これを求めることに専心している人々」を「正しい」とともに「不幸」とも形容していたが、これまで見てきたことからすると、その不幸は一時的なものであることは明らかだ。「求める」という姿勢を継続するうちに、やがてみずからの行為を正しいと確信し、疑いを希望へと転ずることにつながるのだから。上でも述べたが、神を「求めない」ことから「求める」までの距離に比べれば、「求める」ことから「見いだす」までは、紙一重の距離しかない。

以上により、パスカルが、政治や学問における無知とは異なり、人間の自己の運命に対する無知に関しては決して放置を許さなかった理由が明らかになったと思われる。この問いについては、手がかりを見いだそうと徹底的に探求する者だけが「正しく」、そして「幸福である」と言えるのである。

ところで、先ほど、神を熱心に求める人々が、より大きな利益を得られる可能性を追求しているがゆえに「正しい」（「理にかなっている」）と説明したが、このように言うことによって、その人々の求める利得が、富や名誉や権力といった、現世的な価値にかなったものであると想像するのは間違っているだろう。彼らは、宗教の教義に忠実な生活を選び、宗教が説く価値をよきものとして理解しているはずである。その場合、もし彼らが、自分が来世で得

---

102) S682-B195, p. 1226：「この人生の究極の目的についてまったく考えることなく生を過ごし、反省も不安もないままに好みと楽しみに身をまかせ、まるで永遠（éternité）から目をそらせるだけで永遠をなくしてしまえるとでもいうように、ただこの瞬間（instant）だけ自分が幸せであればよいと考えているような人々について、判断してみてほしい。」

られるであろう「無限に幸福な無限の生命」« une infinité de vie infiniment heureuse[103] » が、地上的な快楽に満ちたものであると考えているとすれば、大きな誤りを犯していることになる[104]。そのとき彼らは、ある意味では、「気晴らし」に興ずる者たち、すなわち「神を見いだしてもおらず、求めもせずに生きている人々」よりももっと罪深い存在になってしまう。

では、神を求める人々が期待する幸福、言いかえれば、神が彼らに約束する幸福とは、いったいどのようなものか。これについては、もちろんはっきりしたことはわからない。モンテーニュがちょうどこの問いについて、次のように答えている。「われわれはあの崇高で神聖な約束の偉大さを、いくらかは理解できても、正しく理解することはできない。それを正しく思い描くには、それを想像できないもの、表現しがたいもの、理解できないもの、われわれのあわれな経験が知っている約束とはまったく別のもの、と考えなければならない[105]。」だが、パスカルがこの来世の神的な幸福をどのようなものと考えていたのかについては、次の一節によって示唆されているように思われる。

> ところで、こちらの選択を行うことで、君にどんな不利益が生じるというのだ。君は忠実で、正直で、つつましくて、感謝を忘れず、親切で、友として誠実で、真摯な人間になるだろう（Vous serez fidèle, honnête, humble, reconnaissant, bienfaisant, ami sincère, véritable）。実のところ、君はもはや、有害な快楽や、栄誉や、逸楽からは遠く離れることになるだろう。だが、ほかのものを得ないというわけではないのだよ[106]。

上の文章は、「賭け」の断章の一部であり、「こちらの選択」とは、「神あり」への賭けを意味する。宗教への帰依により、人は「有害な快楽」から遠ざかるかわりに、「忠実」「正直」「誠実」「つつましさ」などの徳を得るという。パスカルはこれらを、「来世への希望」とともに

---

103) S680-B233, p. 1212.

104) この点については、モンテーニュの次の見解が説得的に思われる：「われわれのなかにも、[...] あの世によみがえったのちも、あらゆる世俗的な快楽や幸福をともなった地上的、現世的な生活があると思い込んでいる者がある。[...] 彼［プラトン］に対しては、人間の理性にかわってこう言ってやらねばなるまい。『もしもあなたが来世で約束する幸福が、私がこの世で感じたものと同じなら、そこには無限と共通なものはなにもないことになる。私の自然の五感が歓喜にあふれ、この魂が望みうるあらゆる満足にとらえられたときでも、われわれは、それがどれほどのものかを知っている。それは無に等しいものであろう。そこになにか私自身のものがあるかぎり神のものはなにもない。その歓喜がわれわれの現在の状態のなかにあるものと別ものでないのなら、なんら考慮に値しない』と」（*Essais*, II, 12, p. 518）。

105) *Essais*, II, 12, p. 518.

106) S680-B233, p. 1215.

現世において得られる「幸福」を構成する要素であると考えているのである。これらはすべて、他者との関係において問題になる徳である。自己の利益や優越性を無視し、他者の感情と幸福への奉仕を可能にする徳、要するに「謙虚」（humilité）と「慈愛[107]」（charité）へと通じる徳である。同様のことは、別の断章のなかの次の一節からも理解できる。

> 私は清貧（pauvreté）を愛する。彼［キリスト］が愛したからだ。私は富を愛する。それによって不幸な人々を助ける手段を得られるからだ。私はだれに対しても忠実を守る。[...] 私はあらゆる人々に対して公正で、真摯で、誠実で、忠実であろうと努める（J'essaye d'être juste, véritable, sincère et fidèle à tous les hommes）。そして私は、神が私をしっかりと結びつけてくれた人々に、真の友情を抱いている[108]。

もはや説明の要はないだろう。パスカルにとって、「神を求める」ことによって得られる最大の成果は、公正さ、忠実さ、誠実さといった、他者への愛を示す資質である。そして彼は、そのような資質をもつことがそのまま、現世における幸福にほかならない、と考えているのである。そしてまた、「神あり」を選んだ人々が賭けに勝って手にする来世の幸福もまた、そのような「慈愛」がもたらすなにかであるにちがいない。

自己の死後の運命を知ることに努めること、その答を宗教に求めること。このことが結局、利己的な情欲を捨て、他者や、自己が他者とともに築いている共同体の益になるために生きる姿勢を育む。パスカルにとって重要なのは、死後の永遠の至福よりもむしろ、現世のこの清貧な生活のほうではないだろうか。「この世においては来世を望むこと以外に幸福はない」と語るとき、彼が訴えようとしているのは、来世の存在そのものではなく、それを信じ願うことによって得られるいまここでの生の充実、身体をともなった生命の幸福である。パスカルにとって回心とは、神への帰依であると同時に、倨傲ではなく謙遜を、強欲ではなく無欲を、自己愛ではなく慈愛を、より幸福な状態であるとみなすようになる変化のことなのである[109]。

107）A・コント＝スポンヴィルは、「慈愛」（charité）――または「アガペー」――を「相手を、相手の益のためになるように愛すること」（aimer l'autre pour son bien à lui）と簡潔に定義している。これに対して、「執着」（attachement）――または「エロス」――は、「相手を、自分の益のために愛すること」（aimer l'autre pour son bien à soi）であるという。Voir A. Comte-Sponville, « L'amour selon Pascal », in *Revue internationale de Philosophie*, n° 199, mars 1997, pp. 144-145.

108）S759-B550.

109）そのような生き方の模範を、パスカルはむろんキリストに求めている。Cf. S339-B793 :「イエス＝キリストは、財産もなく、学問の目に見える業績もなく、その聖性の秩序（son ordre de sainteté）のなかにいる。彼は発明をなさず、統治も行わなかったが、謙虚で忍耐強く、神に対してひたすらに清く、悪魔に対しては恐ろしく、いかなる罪も犯さなかった（il a été humble, patient, saint,

*

「三つの秩序」「三つの邪欲」に加えて、パスカルは人間のなかに「三つの無知」を認めている。

第一に、正義の無知である。この無知は、共同体の秩序と平和が維持されるかぎりにおいて許容される。その意味で、既成の法や政体に根拠がないことを指摘し、それらの改革を叫ぶ姿勢は非難の対象となる。最悪の場合、内戦を引き起こす危険があるからだ。真の知者は、人間が正義を知りえないことを自覚しながら、「裏の考え」に従って、そのことを知らぬ民衆の錯誤を維持するように努める。また、正しき為政者は、自己の地位が偶然の賜物であることを知りながら、「二重の考え」をもって、臣民の幸福の実現というおのれの義務に没頭する。このとき両者は、「無知の知」に基づく謙遜の念と、他者に対する慈愛の情を備えている。

第二は、学問的真理の無知である。あらゆる学問の発展は、人間の知識欲を原因としている。動物の知識に進歩がないのは、動物が現状に不満を覚えないからだ。だが、身体という桎梏をもつ人間の知恵は原理的に有限であり、しかも個々の知識はつねに更新される可能性がある。人間の知はすべて暫定的な真理にとどまる。人間はわずかな知識を誇るのではなく、自己の根本的な無知を知り、謙虚に努めなければならない。だが、その境位に至るのは、最高の知者のみである。知恵と謙遜とは、同じひとつの徳である。ちょうどキリスト教が「賢明」にして「愚か」であるように。

そして第三に、自己の死後の運命に関する無知だ。人間の生の時間は、死後の永遠に比べれば一瞬にすぎない。よってその短い生涯は、幸福な来世を迎えるための準備に費やされなければならない。しかるに人間は、おのれの死から目をそらすために、空しい享楽に没頭している。人間の現世の幸福は、来世への希望と、それに近づいているとの確信にある。それを得るためには、「神あり」を信じ、死後に至福を与えられるにふさわしい生を送るしかない。その過程で、利己的な欲望を解脱し、つつましく、正直で、他者に親切な人間になるだろう。そしてそのような変化が、すでにして「神あり」への賭けの恩恵なのである。

---

saint, saint à Dieu, terrible aux démons, sans aucun péché)。おお、知恵（la sagesse）を見る心の目をもつ人々にとっては、彼はいかに偉大な壮麗さと驚異的な豪華さをもって来臨したことか！」

また、「謙虚」は、デカルトが理想とする「高邁」の状態においても重要な要素である。「もっとも高邁な人々は、たいていもっとも謙遜である（les plus généreux ont coutume d'être les plus humbles）」（*Les Passions de l'âme*, in Descartes, *Œuvres philosophiques*, *op. cit.*, tome III, 1989, art. 155 « En quoi consiste l'humilité vertueuse », p. 1069）。

以上から、何が言えるだろうか。政治と学問において、生半可な知者がささいな知恵を誇り、最高の賢者はおのれの無知を自覚する。宗教においては、真理の探究を怠る者が「愚か」であるとされ、心を尽くして求める者だけが「正しい」とされる。このように、それぞれの領域において、人間に求められるふるまいは異なるが、最終目的は同じである。それは、利己的な欲望を抑制し、他者の幸いを望むこと、そして、そのような他者と自分がつくる共同体の平和を願うこと、すなわち「愛」（charité）である。

引用凡例

1）パスカルからの引用は、すべて次のテクストに従う。

Les Provinciales, Pensées et opuscules divers, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris, Librairie Générale Française, « La Pochothèque », 2004（本書所収の *Pensées* の断章配列はセリエ版に従っている）.

2）『パンセ』からの出典箇所は、セリエ版、ブランシュヴィック版の断章番号を、それぞれ記号 S, B に続けて示す。長い断章からの引用の場合は上記 La Pochothèque 版の頁番号も付す。

3）その他のパスカルの作品からの出典箇所は、作品の原題と、上記 La Pochothèque 版の頁番号によって示す。

4）モンテーニュ『エセー』からの引用は、次のテクストに従う。出典箇所は「*Essais*, 巻 , 章 , 頁」のように示す。

Montaigne, *Essais*, éd. P. Villey, sous la direction de V.-L. Saulnier, Paris, PUF, « Quadrige », 3 vol., 1992.

5）引用の日本語訳は、各種の既訳書を参考にして、引用者が作成した。

6）引用文中の傍点による強調および［　］内の補足は、すべて引用者によるものである。

（本稿は、「平成23-25年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・課題番号23520377」による研究成果の一部である。）

Pascal et les trois ignorances

Hirotsugu YAMAJO

Aux yeux de Pascal, l'ignorance de l'homme se manifeste dans ses trois différents domaines d'activité : la politique, la science et la religion.

D'abord, l'homme ignore la justice. Toute loi est établie par l'arbitraire du monarque. Le peuple, ignorant ce fait, s'y conforme. Les vrais sages et les bons souverains prônent cet aveuglement parce qu'il sert à maintenir l'ordre de l'État et à assurer la sécurité du peuple lui-même.

Ensuite, l'homme n'atteint jamais à la perfection scientifique. La capacité intellectuelle de l'homme est finie parce qu'il est doté d'un corps. Par ailleurs, toute connaissance humaine pourrait s'avérer fausse suite à une future découverte. Les curieux, inconscients de leur ignorance, deviennent orgueilleux. Tandis que les plus sages se reconnaissent ignorants et restent humbles devant les merveilles de la nature.

Enfin, l'homme est ignorant de sa propre destinée après la mort. Mais son devoir est de savoir comment il peut jouir du bonheur céleste s'il existe une autre vie. Dans cette fin, il n'a pas d'autre choix que de se dévouer à Dieu. Ceci lui permettra de se détacher de tout désir terrestre et de devenir humble, honnête et sincère face à autrui.

Ainsi, l'ignorance — ou la reconnaissance de son ignorance — se révèle vertueuse dans la vie politique et la vie scientifique, et vicieuse dans la vie religieuse de l'homme. Mais dans tous les cas, le devoir de l'homme consiste à dominer les passions égocentriques et à réaliser le bonheur d'autrui ou le bien public : en ces actes témoignant de la « charité ».